

21 回ふれあいトーク (子育てしやすいまち高岡を目指して) 会議記録

1、日 時 平成 26 年 1 月 22 日 (水) 午後 7 時から 8 時

2、場 所 ふれあい福祉センター 2 階 パソコン室

3、出席者 20 名

民間保育園保育士 10 名

市長、児童育成課長、広報統計課長

4、会議次第

(1) 市長挨拶

(2) 出席者紹介

(3) 意見交換

意見交換

参加者

- ・ マイ保育園事業について、他の保育園の状況を聞きたい。
- ・ 当保育園は、3～4 人がマイ保育園事業に登録しており、出産を控えた親が未就園児の親子が来る日に来園し、未就園児の母親や担当保育士に相談などを行っている。

参加者

- ・ 当保育園は、マイ保育園事業に 20 名ほどの登録があり、未就園児親子が遊びに来るほか、出産を控えた親が参加して育児体験を行っている。マイ保育園事業により、あらかじめ保育士や保育園の雰囲気に馴染んでおり、入園時には信頼関係が築かれていることで、親が保育園に相談しやすいなど役立っている。相談の内容は食事の進め方など具体的な生活面のことが多く、保育園のノウハウを伝えたり、その時必要としている情報を提供できている。また状況の似ている親同士や子どもの現状を見ることができ、刺激になっているように思う。

参加者

- ・ 当保育園ではマイ保育園事業に 8～9 人が登録している。子育てサロンは実施していないが、マイ保育園事業の登録者から遊びにきたいなどの事前の電話があれば受け入れている。同年齢の子どもを見ることで発達が理解できたり、子育てに関する悩みを保育士に相談する姿が見られる。

参加者

- ・ 年 2 回程度マイ保育園事業のプレパパ、プレママ体験により赤ちゃんに触れる体験をする場を設けている。利用者からは実体験により、子育てに対し安心できたり、赤ちゃんの柔らかさを体感できる機会になってよかったとの声を聞く。

市長

- ・ 未就園児を預かる場合は、子どもが慣れていないため、信頼関係を築くための苦労や工夫があるのではないかな。

参加者

- 子どもは親がいるから安心している。保育園側は、同じ保育士が担当することで不安の解消に努めている。楽しければ子どもも来たくなり、親もつれて来たくなる。

市長

- 子どもにとっては、一つの社会経験となっているのではないか。
- これから子どもが生まれる親で、心理的に硬くなっている人はいないか。

参加者

- お腹にいる子が第1子である場合には硬くなっている場合がある。

参加者

- 第1子の場合は、保育園に対し心理的な垣根があり、保育園に行くのに勇気がいると思う。

市長

- そういった親へのアプローチはどう行っているのか。

参加者

- 保育園の近くの産婦人科病院にマイ保育園事業のパンフレットを置いているが、あまり反響がない。一方、口コミの影響は大きいと感じる。

市長

- 保育園から出産を控えた親に直接働きかけることはできないため、親が参加に踏み切るまでが難しいのかもしれない。

参加者

- 当保育園では支援室を設けており、親同士の情報交換の場にもなっていて、そこから広がる口コミが有効なようだ。口コミや、知り合いがいるなどであれば親は参加しやすいようだ。

参加者

- 未就園児は校区を超えて、知り合いがいる園を利用することができ、それが良いという声もある。

参加者

- 最近はインターネットや携帯電話で調べたり、HPを見て参加したり、メールで問い合わせる親が増えており、保育園からもメールで回答したりしている。

市長

- インターネットやメールなどに対応できる体制が機能しており良いと思う。
- 対処しにくいケースへの対処方法などはあるか。たとえば子どもが親と離れたがらなかったりする場合はどうするのか。

参加者

- 無理に離すことはしない。一緒に色々試してみて、反応が良ければまた勧めるなどしている。

市長

- 話を聞いていて、初めて子育てをする親にとっては、保育園への心理的な敷居を低

くする工夫が必要で、利用しやすい雰囲気を作ることが大切だと思った。また、未就園の子が社会生活を学習するよい場であり、たくさんの人に利用してもらいたい。医師会と連携し産婦人科医などから母親に紹介してもらうことも有効かもしれない。

- 親からの相談は、保育士さんで対応できるか。

参加者

- 子どもの病気や体のこと、食事などの専門的なことは、看護師や給食の先生や主任が対応している。保育士が本で読んだ知識と違い、経験があり同じことを言っても重みが違うと感じる。

市長

- 看護師がいることで変化があったことは何か。

参加者

- 当保育園では、看護師2名が主となり、嘔吐や下痢などの対処法について保育園のスタッフが専門知識の学習やロールプレイングする時間を設けている。実際に起こった時には冷静な対処ができ、感染拡大予防に役立っている。
- 子どもに対しても、看護師が歯の磨き方や体の仕組みについて教えており、日々の保育において看護師と子どものふれあいは大変役立っている。

参加者

- 当保育園では常駐の看護師の他に外部から看護師を招き、保育園スタッフが病気への対処や準備について勉強している。

参加者

- 親も、子どもが病気やけがをした際には、子どもの状態を診た看護師から話を聞くことにより安心する。

児童育成課

- アレルギーによるアナフィラキシーショックを防ぐためのエピペンの使用に備えなければならないなど、アレルギーを持つ子どもが増えているが、アレルギーへの対応はどうか。

参加者

- エピペン使用が考えられる子どもが入所した際、看護師と園長が、子どものかかりつけ病院に行き医師から話を聞いてきて、保育園のスタッフと情報を共有している。毎月の献立表を看護師と給食の先生がチェックしており、また、食べられないものが食べられるようになった場合にも、看護師と給食の先生が情報を共有している。また、仮に誤食が起こった場合の対応も共有している。

市長

- 食物アレルギーを持つ子どもに対し、その他の子どもの反応や理解はどうか。

参加者

- アレルギーで食べられないことを他の子どもにも伝え、オープンにすることで子どもも認識し、「食べられるようになったら嬉しいね」とみんなで受け入れている。

子ども達もマイナスとして捉えるのではなく、思いやりの一つとして学んでいる。

市長

- 子どもの頃から、そういう認識を持つことは素晴らしいことだと思う。

参加者

- 当保育園でも、保育園のスタッフが看護師からエピペンの使い方を習い、実際に模擬エピペンで練習して備えている。

児童育成課

- 最近は食物アレルギーが増えている。給食は、食べられない物を除きながらも、できるだけ同じ物を作り、皆と同じようなものを食べられるように配慮している。

市長

- スタッフ皆の協力のもと、アレルギー対応がされておりありがたい。
- 子どもたちの様子を保育園の中で共有する方法は、どうやっているか。

参加者

- 常に情報共有の場を設けているほか、アレルギー等の問題のある子どもが入園する際には、事前に看護師、園長、保育士が協議し、情報の共有を図っている。

参加者

- 発達等が気に係るケースは保育園で会議を行い、全体で情報共有し、子どもが混乱しないようにどの保育士も同じ表現で子どもに伝えることなども気を付けている。

市長

- きずな学園の巡回指導はどうか。

参加者

- 発達支援講座に参加し、年間通してためになる話を聞くことができ、役立っている。巡回指導もよく1人1人を見ていて、保育士が気づかない事も教えてもらうことができ助かっている。

市長

- 保育園からは巡回指導が役立っていると聞いているが、小学校進学の際の移行が難しいと聞いており、教育委員会とも連携し動き始めた。皆でケアし、子どもたちにとって良い状況が作れるように努めていきたい。

参加者

- 当保育園にはきずな学園から年3回指導にきてもらっている。その他に、月1回、心理カウンセラーの専門医に来てもらい、母親の相談を受けたり、気になる子どもを診てもらい、専門医のアドバイスを保育に役立てている。また、小学校の先生と心理カウンセラーに子どもの様子を見てもらい、保育担当と協議し、連絡を取りながら、小学校への移行がスムーズになるよう努めている。

市長

- そのような保育園の取り組みに感謝している。幼稚園と保育園、福祉部局と教育委員会がうまく連携し子どもたちの生活の中で保育と教育がうまく繋がってほしい。

児童育成課

- 子の立場に立った支援をする中で、子どもを優先して考えていると思うが、親の在り方など、気になることはあるか。

参加者

- 親同士がおしゃべりに夢中になって子どもを見ていないなどが目につくことはある。

参加者

- 親同士のおしゃべりも、親の心の安定のためにも大切な時間ではある。子育て支援として、親と子それぞれの立場のニーズのバランスを取っていくのは難しい。

市長

- そういう事例の研究や、対処法などはあるのか。

参加者

- 気になる保護者も増えており、保育園が親育てをしていかななくてはならなくなっている。親がおむつをとるトレーニングを家ではあまりしないなど、子育てを保育園任せにするケースも出てきている。

市長

- そういう場合は親に注意するのか。

参加者

- 直接的には注意せず、保育園のやり方を紹介しながら家庭内での取り組みも勧めているが、指摘が必要と思われる場合には保育園で協議し、園長から伝える場合もある。「子育て支援」とは子育てを保育園に任せきりにすることではないはずだが、実際には保育園に頼りきる親もあり、家庭内での養育と子育て支援の区別が課題になっているケースもある。

参加者

- 保育士としても意見もあるが、一方で、子を持ちながらフルタイムで働いている親の立場としての意見もある。100%保育園に任せる気はないが、現実的に手が回らない面もあり、結果として保育園に甘える部分もある。実際子を持ってみて、働いている母の気持ちもわかるようになった。

市長

- 難しい課題であると思う。親が担う子育ての役目を知らないのと、わかっているが、仕方なく保育園にお願いしているということは意味合いが異なる。親と保育園のコミュニケーションが大切であると感じた。

児童育成課

- 親と子どもを切り離すことができない。親が落ち着けば子どもも安心する。子どもが成長すれば親も嬉しいし、親と子の互いの育ちの中で保育士がどこまで支援してあげるかが難しい。

参加者

- 子どもを持ってみて、親の情緒の安定は、子どもにとっても影響すると実感する。親

の情緒が安定した状態で過ごせることはとても大切である。

市長

- 良い意味での親同士のおしゃべりしながら情報交換や相談をする場を設けることは大事であると感じる。
- 参観や個別面接などはあるか。

参加者

- 自宅訪問、個別面談のほか、保育士と話したい親を交えた懇談の場を設けているが、もっと話をしたい親ほど参加しないケースが多い。

市長

- 保育園でコミュニケーションの場を設けていることは大変よいと思う。普段参加しない親からも気軽に情報交換の場に触れられる仕組みがあればいいと感じた。

児童育成課

- 保育園と親がうまく接点を持つことに保育士は心を砕いている。保育士の支援したいという気持ちが大切で、これからも高岡の子どもたちを育ててほしい。

市長

- それぞれの保育園が本当によく子どもたちのことを考えていることに感謝し、心強く感じた。仮に保育に欠ける状況でなくても、社会的に子どもの世話をすることは大切であると思っている。幼稚園や保育園の仕組みが変わることも議論されており、これからも市への意見を聞かせてほしい。
- 保育士の皆さんが日々問題意識を持って保育を行っていてくれて嬉しく感じた。親や保育士が悩んだ時に相談するシステムがあって、悩みを一人で抱えずチームでケアしていくことが大切であり、市としても応援していきたい。また、皆でディスカッションの場があり、意見が出ることが良いと思う。
- 就園、未就園も含め、子どもたちができるだけ早い時期に社会デビューし、保育園・幼稚園から小学校、中学校と切れ目なく支援していくことが大切と感じる。子どもが成長し刺激を受けながら強く育っていくことも必要で、その最初の場面で、保育士の皆さんに尽力していただき、感謝している。これからも、子育てを支援して欲しい。

以上